

黒須重彦 著

漢字文化圈の諸問題

— 文字 —

江苏工业学院图书馆
藏书章

藏野書院

黒須重彦(くろす・しげひこ)

略 歴

昭和28年 東京大学文学部中国文学科卒業

現在 大東文化大学文学部教授

著書

『屈原詩集』(角川書店・昭和48年1月)

『楚辞』(学習研究社・昭和57年5月)

『夕顔という女』(笠間書院・昭和50年1月)

『源氏物語私論』(笠間書院・平成2年2月)

など。

漢字文化圏の諸問題

—くこえと文字—

平成4年4月20日 初版発行©

定価 4,500円

(本体4369円)

著 者 黒 須 重 彦

発行者 前 田 武

印刷者 柿 崎 忠 一 郎

発行所 武蔵野書院

東京都千代田区神田錦町3-11

電話 (03) 3291-4859

振替 東京 9-67146

ISBN4-8386-0127-1

序

著者は、東京大学文学部中国文学科の研究に志し、中でも「楚辞」を専攻し、すでにそれについての専著も公にされている。しかし、著者の最も独特な見解は、「楚辞」という作品が楚語で書かれた原著そのものではなく、その漢訳であるという点にある。著者は、他方、無文字社会に興味を覚え、川田順造氏の著述を好んで読んだ。そしてそういう無文字社会の民族が文字を知り、文字でその言、所を表すに至った過程に注目した。就中、いわゆる漢字文化圏の中において、漢民族以外の民族が漢字を習得して、各自の土語で語られるものを漢文に翻訳し、かつ漢字を以て土語を写し出そうとする努力を総括的に考察した結果、漢字文化圏における文字活動の公式（第一章）を思いつくに至った。

その公式によって示される構想によって眺めると、種々の問題に光明を当てることができることを発見し、その結果が本書となって実ったのである。それは単に楚辞の正体の解明（第六章）に止まらず、古事記と日本書紀の関係という大問題にも新しい視点が提案されているし（第三章）、「新撰万葉集」についても独自の見解が示されている（第五章）。そして、同様な考え方から、源氏物語の「螢」の巻の「物語論」も見直そうとしている（第四章）。

i 序
著者は、大学卒業後、長い間、高等学校で国語の教師として教鞭を執っている間に、源氏物語を精読し、それに就いて一家言を持つに至った。源氏物語のような日本の古典の背景に中国文学の伝統が流れていることは常識であるが、著者は中国文学についての深い造詣をもとに実証する試みもいくつか世に送っている。源氏物語の「物語論」もその

片鱗の一つである。その他、写本と版本との関係についても人の気づかない点を指摘している（第七章）。

以前から、文字について、その言語的機能を対象とする文字論ともいべき分野が、従来、言語学の中で蔑ろにされてきたが、当然あつて然るべきであると主張してきた筆者は、この著者の考え方に全面的に共鳴を禁じ得ない。筆者も、文字言語について音声言語との本質的相違を考えているが、著者は著者独自の発想でそれを具体的に立証しようとしている。文字で書かれたものの伝承に、音声が入介入することは確かである。とすると、著者の立論にもっと耳を傾ける必要があると思われる。なお、著者の「カタカナ意識」の論はなかなか面白い。

著者は、筆者が大東文化大学に勤めていた時の同僚である。そして著者からその面白い話しを聞く機会を持った。本書はそれらの話しを発展させた集大成である。今後、本書の立論を土台として文字と音声の関係をより深く究明せられんことを期待して已まない。

平成四年三月

河野 六郎

前 書 き

漢字文化圈の問題を考えるようになって相当の歳月が経過した。筆者は『楚辞』考究に携わってきたものの一人であるが、『楚辞』研究史を振り返ってみると、『楚辞』の作品そのものに関する研究者の見解からして、まちまちであるとともに、『楚辞』成立の論に至っては、実に漠然としていて、不可解なものであった。

『楚辞』成立に関する筆者の見解は、第六章にまとめたつもりであるが、今まで行われてきた『楚辞』論は、漢字文化圈という広い視野に於て為されることは、皆無であつたといつてよい。

こと文学作品、特に詩・歌などは、母国語でなければならず、それは、古今東西を通じて同様であろう。実に単純な条件であるが、古代楚の国に於ける文学の営為が、その古代の楚語によつて為されていた、という仮定を描いた時、現在遺されている『楚辞』は、純然たる漢語なのであるから、そこに、漢語民族ならぬ民族の言語を、漢字によつて表記する、或は、その母国語を漢語訳することによつて、漢語世界の存在物に化するというような問題が生起してこなければならなくなる。

とすれば、わが国は、まさにその漢字文化圈の長い歴史を歩んできたわけであるから、この種の問題を考究するのには、或は最も適した性格を持っていたはずである。

そこで即座に思い浮かぶのは、『古事記』・『万葉集』・『日本書紀』といったわが国の古典である。わが国は、漢字文化圈の問題を考えるのに、その資料には事欠かないわけである。実にその「宝庫」といつてもよい。

推測するのに、中国に於ては、そういう漢字文化圏というような視野に、『楚辞』を持ち出そうとする発想は生まれにくかったのではないか。

筆者は、『楚辞』探究への道程を、日本古典、特に『古事記』を初めとして、我が古代における「書」が如何なる性質のものであるか、また現在どのような理解がなされているのか、という方向へ、転ずることにした。

この『古事記』への関心が深まるにつれて、少年の頃から強い興味を覚えていた、他の日本古典、特に『源氏物語』をも、この見地から見直すことになり、しばらくは『楚辞』へ帰ることができなかった。

ところが、『楚辞』以上に、『古事記』がまた、筆者を困惑させた。到底納得できないような解説に邂逅したのである。漠然と学んできた『古事記』に、無数といってもよいような「異説」のあることを知らされた。

その中で、最も筆者の興味を持ったものは、『古事記偽書説』であった。そうして、さらに、『古事記偽書説』に対する殆どの反論が、『古事記偽書説』に完全に答えることができないまま論じられていることをも知ようになった。

しかし、『古事記偽書説』には、どうしても同意できなかった。何故なら、『古事記偽書説』への反論者が、その反論の為に、必ずといってもよいほど用いるものに「上代仮名遣いの研究」があるが、それ以前に、『古事記偽書説』は、その「偽書」を制作したという「動機説」が余りにも薄弱であると、筆者には思われた。

また、『古事記』のような「書」に限らず、古人の制作し遺した「文書」に対する態度に、時として、恣意的なものを感じさせるものもあった。

一方筆者には、「書」というものは、遡ればさかのぼるほど、当時の知識人たちの共通理解が得られなければ、この世に出現することが難しく、遺りにくいはずだという素朴な理念があった。

そうして、わが国の『古事記』学者の中にも、『古事記』を漢字文化圏という視野で見る意識に欠けるものが多く、それは、恰も中国で『楚辞』を漢字文化圏の中で捉えようとする意識の稀薄であるのと似ているように思われた。

『古事記』に限ったことではない。意外に、日本の古典を考える時、International意識の乏しい論述を多く見るようになった。例えば『土佐日記』などの研究書に触れた時、それを感じた。

このことは、言い換えれば、当時の知識人たちが、どれほどInternational意識に制約されていたか、という見地からの追求・分析が忘れられているということになるかもしれない。

この知識人たちの「意識世界」へ直接しようとする方向への探究、または、その意識世界から、当時の「外」を見ようとするような探究の仕方が、今まで意外に稀薄であつたように思われた。

そもそも「言霊」の伝統にある民族と、「文字」を信仰する民族との間に、どのような懸隔・異質があるものなのかということが、もつともつと問われてよいのではないか。また、この両者が接する境界線においては、特に「無文字国」側には、「物」と「心」との両面にわたって、どのような様相が出現しなければならないか。

この分野に於ける先覚者の業績は、我々を押しつづけてしまふほどに、うずたかく堆積している。しかし、かいつて、依然として研究者間の共通理解は見られず、それぞれ各自各様の「異説」に出会って、困惑させられるのが現状である。

古典がこの世に残されてきたというのは、無数の人の手に支えられてきたはずであり、千年の風雪に堪えてきたということには、厳粛な意味があろう。その古典に、そのような疑義が生じる原因・理由は、その殆どが、その古典が生産され享受された当時の諸条件の後世に於ける変化、或は欠落にある、つまり「こちら側」にあると、筆者には思われるのである。

現代もなお、無文字の世界はこの地球上に広くあるのであり、文字の有無が文化程度を測る尺度であるというのは、一つの偏見・思い上がりに過ぎない。

筆者は、この「言霊」の伝統と「文字伝統」との接触面に興味を持ち、そこにこそ『楚辞』『古事記』の成立論の基

盤を置かねばならないと思うようになった。

この「接触面」の具体的な試みとして、筆者が深い関心を持ったのは、萱野茂氏の『ウエペケレ集大成』であった。実に、我々の身近にそれはあったのである。

筆者は、この貴重な著作から、漢字文化圏を考える時、単なる思いつきでなく、現実にもそのものを目前に置いて「公式」を設定し、それに拠って、遠い過去に行われたであろう「古人」の「営為」を考究することにしたのである。

平成四年二月

黒 須 重 彦

目 次

序	河野六郎	1
前書き		iii
第一章 漢字文化圏を考える時の公式		1
第二章 表記意識		7
第一節 会話意識と表記意識		7
第二節 「カタカナ意識」とは		14
第三章 『古事記』から『日本書紀』へ——『古事記』の「序文」を中心として——		25
第一節 記録と歴史と国家		25
第二節 「帝紀」と「旧辞」について		29
第三節 『古事記』と『日本書紀』との関係について		35
第四節 『古事記』偽書説		39
第五節 『古事記』から『日本書紀』へ		44

第四章	『源氏物語』「蛩」の巻のへものがたり論	48
-----	---------------------	----

第五章	『新撰万葉集』について	85
-----	-------------	----

第六章	『楚辞』の成立	120
-----	---------	-----

第一節	突然に出現する「楚辞」という語	121
-----	-----------------	-----

第二節	普通名詞としての「楚辞」	123
-----	--------------	-----

第三節	「楚辞」における文と辞	124
-----	-------------	-----

第四節	周辺民族の漢字表記	133
-----	-----------	-----

第五節	『楚辞』の成立過程	142
-----	-----------	-----

第七章	書写と印刷	155
-----	-------	-----

第一節	写本から版本へ	155
-----	---------	-----

第二節	注釈について	165
-----	--------	-----

第三節	表記の裏側に隠れている「こえ」	172
-----	-----------------	-----

第四節	「こえ」から書写への場面	181
-----	--------------	-----

あとがき		198
------	--	-----

索引		左1 (206)
----	--	----------

第一章 漢字文化圏を考える時の公式

萱野茂氏の著作に『ウエペケレ集大成』（一九七四年・株式会社アルドウ刊）がある。この著作はどのような体裁を持っているかというと、

- ① アイヌの伝承の録音テープ。
- ② そのアイヌ語のカタカナ表記。
- ③ そのアイヌ語の日本語訳。

右の三部、及び注から成り立っている。

この『ウエペケレ集大成』は、ひとりアイヌ伝承の貴重な記録というだけでなく、いろいろな意味で示唆に富む。今、この①・②・③について、いろいろな角度から、問いを投げかけてみる。

- ① 著作者である萱野茂氏の意識に於ては、この①・②・③のうちどれが最も中心であるか。
- ② 日本語民族の側の意識に於ては、この三者のどれが最も中心となるか。

①に於ては、著作者は、**①**こそが実体であり、**②・③**はともにその実体**①**から派生したもの、本来**①**とは何ら関係なきものと思識されているであらう。

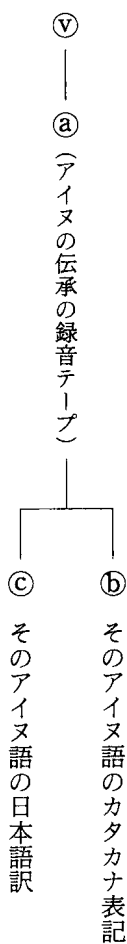
②に於ては、この著作物を、いかなる意味、或は目的で購入したかの、立場・視点等から、人によつて微妙な差が出てようが、一般的にいって、アイヌ語そのものには関心を持たぬ者にとつて、まず興味を持つのは、**③**の和訳であらう。つまり**③**を中心としてこの著作を見るであらうと推測される。

本来的にこの世に現実に存在しつづけた実体は、あくまでも**①**であつて、**②**や**③**ではない。それどころか、**②**や**③**は**①**にとつて、本来何の関係もない。

この**①**が、たとえ時とともに微妙な変貌を見せて来たとしても、なぜ存在し続けることができたのかということは、漢字文化圏の問題を考へるとき重要な事項である。

結論的に言えば、この**①・②・③**の三者が漢字文化圏を考へるための公式である。(或はもっと広く音声の世界と文字表記を考へるときの、といつてもよいと思う。)

更に、この公式は、11頁の**⑦**記号を用いるなら、次のようにならう。



この公式に、更にいくつかの問いを投げかけてみよう。

- ① ㉔の「日本語訳」は何故作られたか。
- ② ㉔の「カタカナ表記」は何故作られたか。
- ③ そもそも㉔は何故作られたか。

①についての答は、ほぼ次のように考えられよう。

アイヌ語を知らぬ日本語民族に、アイヌの「ウエペケレ」の内容・意味を何とか伝えたい、或は、アイヌ語を解さぬようになりつつある、本来のアイヌ語民族の世代に、アイヌの伝承の内容・意味を遺し伝えたい、という目的がそこにはあろう。

それでは、②の問いにはどのように答えたらよいであろうか。

テープ録音のみを聞いていたのでは、それがどのような音声であるかを理解するのは、極めて難しいのである。

アイヌ語の世界に一月、半年、一年、五年と常時交わることなくしては、アイヌ語の微妙な発声を理解することは不可能であろう。アイヌ語のカタカナ表記を目で見つつ、テープ録音を繰り返し聞いてみると、そのことはすぐ分る。従って、この②もまたアイヌ語を知らぬ人々が、このテープ録音の音声がどのような発声をしているのかを、一応、分るようにとの配慮から作られたものということができる。

同時に著作者の意識を推測してみるのに、このテープに録音されたアイヌ語の音声がどのようなものであるかの再確認をするとともに、表記化することによって文字社会との接触を果たし、将来文字社会にこの「ウエペケレ」が遺されるようにとの願いが込められている、更にアイヌ語研究者への資料となるようにとの配慮があるということができるであろうか。

そうして最後に④の録音は何故行われたのであるか。この事項は、漢字文化圏を考える上での重要事項の一つであると考えられる。

もしも、このアイヌ語の世界が昔ながらのまま続いているとしたら、こういうもくろみは、もともと発想されなかったであろう。アイヌ語の伝承が徐々に失われつつある、その危機感がこの貴重な仕事を行わしめたのであろう。

萱野茂氏は次のように言う。

「この本を作ることで、私が一番考えたことは、もともと文字のないアイヌ語を書きとるのに、カタカナで書こう、それであれば、私自身も読めるんだ、また俺のウタリのアイヌも読めるんだ、ということでした。それによってアイヌ語を復活させ得ると思いませんが、少なくとも、アイヌ語の命を延ばすことはできると思います。今、四十才、五十才の人達であれば、これを読んでいけば、『ああ、そうだそうだ。この言葉はこうだ。あ、そうだ』というふうに皆が思い出して、皆がそれを見直し覚え直すことによって、今四十才の人が覚えれば、少なくとも後三十年は寿命延ばせるものね。だから、アイヌ語を復活させるということではなくて、アイヌ語の寿命を延ばす本になればいいなと思っています。」

〔ウエベケレ集大成〕二四一頁〕

この萱野茂氏の言うような状況、つまりこのままでは、「ウエベケレ」も、アイヌ語そのものも消滅してしまうという、危機感の存在を、我々はここで確認しておかねばならない。後述の各論にも重要事項と思われるからである。さてここで、より本質的問題に入っていこう。

それは、②は何故可能であったかという問題である。

これに対する答は、いうまでもないことであろうが、次の条件が存在するからである。

- ① 「ウエペケレ」の伝承が語り継ぎ言いつがれて近・現代まで遺されていた。
- ② 近代科学の生んだテープ録音という新しい技術が開発された。

右の二事項が、この萱野茂氏の事業に不可欠であるのは、誰の眼にも明らかであろう。

しかし問題はその先にある。

①の「ウエペケレ」の伝承は何故遺されていたのか、それもすべて録音し切れないほどの夥しい量の伝承が残されていたか、という問題である。(今夥しい量の、と言ったが我がへやまとでは文字に接する以前に、〈ウエペケレ〉——ものがたりは存在しなかったものであろうか。「ウエペケレ」に匹敵するほどの夥しい量の、つまり一つの民族の空間と時間を埋め尽くすほどの「ウエペケレ」は無かったのだろうか。この問いについては第四章77頁以下を参照されたい。)

この「ウエペケレ」が語り継ぎ言いつぎされて遺された理由の一つとして、そこには歴史的・政治的・民族的等々さまざまな条件が考えられようが、アイヌの人々が自国語の文字表記を拒否してきたことがあげられよう。

もし文字表記を採用していたら、その形態システムはどうなっていたかは分らぬが、この「ウエペケレ」は、今のような形で残ることが難しかったということが出来る。

そこで、先の「ウエペケレ」の三つの柱、①・②・③を、漢字文化圏を考えるときの公式として、例えば、我が国の古代に適用してみたとき、どうなるか。

わが国の場合、録音技術の無い時代であるから、当然、①の「アイヌの伝承の録音テープ」に相当するものがない。それどころか、⑤そのものの消失という運命を辿ったことになる。従って、次のようになる。



これを言い換えれば、自国語による音声伝承を、他国語（漢語）を表記するための文字（漢字）によって記録していた、そればかりか、更にその音声伝承の流れを、文字文化の世界へと移してしまってしまふ（翻訳する）ということも行われたということになる。

ところで前掲の三つの柱、(v)、(a)、(b)、(c)を、どのように考えるか、というよりこの三者の間にどのような距離があるのか、また三者はどのような絆によって結ばれているのか、といった考究が今まで必ずしも充分になされていたとは言い難い。

本書は、上に示した公式を常に念頭に置きながら、

(v) (a) と (b) の間

(v) (a) と (c) の間

(b) と (c) の間

を検討し、同時に従来不可解とされていた幾つかの課題の解明を試みようとするものである。